

## 書評

### 21 世紀の世界をどう論じるか？

湊 直信

国際通貨研究所 客員研究員

立教大学国際経営研究科 兼任講師

- ① スティーブ・ピンカー、2019 年、「21 世紀の啓蒙：理性、科学、ヒューマニズム、進歩、上、下」草思社、橘明美、坂田雪子共訳  
Steven Pinker, 2018, “Enlightenment Now: The Case for Reason, Science, Humanism, and Progress”, Penguin Random House LLC
- ② パラグ・カンナ、2019 年、「アジアの世紀：接続性の未来 上、下」、原書房、尼丁千津子訳  
Parag Khanna, 2019, “The Future is Asian: Commerce, Conflict, and Culture in the 21<sup>st</sup> Century”, Hybrid Reality Pte. Ltd.

スティーブン・ピンカーはハーバード大学心理学教授であり、進化心理学の第一人者である。心理学に関する多くの著作があり、米タイム誌の「世界で最も影響力のある 100 人」やフォーリンポリシー誌の「知識人トップ 100 人」に選ばれたこともある。

パラグ・カンナはインド生まれで、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで博士号を取得し、ブルッキングス研究所研究員、ニューアメリカ財団研究員、シンガポール国立大学リー・クアンユー公共政策大学院研究員等を歴任している。現在、調査コンサルティング企業（Future Map, と Hybrid Reality）の業務執行役員。SRID ジャーナル第 17 号（2019 年 7 月）の書評で紹介した「接続性の地政学：グローバリズムの先にある世界」の著者でもある。

この 2 冊の和訳は共に 2019 年の 11 月と 12 月に出版され、両方とも分析、議論の対象を 21 世紀の現代世界と広く設定している点に共通点がある。また、両者とも多くの協力者から得たデータ、情報、実例といった事実の蓄積に基づいて、かなりの分量のページ数を割いて議論を展開しており、理由は異なるが、共に現代と近未来の世界を楽観的に捉えている。開発途上国についても明るい見通しを示している。しかし、両方の著者の執筆の動機、分析の視点、分析の学問的背景、焦点の当てている地域と関心は全く異なる。

一冊目①の著者の執筆の動機は、アメリカにおいて多くの人々が時代を否定的に見ており、「こうした希望のない現状評価が間違っていることを明らかにすること」である。

基本的に経済、社会、ガバナンスに関する情報やデータにより事実を提示して、今まで米国と世界の社会が進歩してきたことを主張している。分析において使用されている学問的背景は哲学、心理学、現代史、社会学をはじめとした多様な学問領域である。対象地域は主に米国に焦点を当てているが、西欧をはじめとした世界にも言及している部分が多い。

「世界は悪化しつつあるといった悲観論」や「現代の諸制度に対するシニシズム」に対して、著者は理性、科学、ヒューマニズム、進歩といった啓蒙主義の理念の提示から出発している。啓蒙主義により、理性の基準から世界を見て、科学革命により無知と迷信から脱却し、共感という感情がヒューマニズムを生み、人類は知的にも精神的にも進歩してきたとして、いつの時代になっても啓蒙主義を維持することの必要性を説いている。著者は多くのデータや情報に基づいた事実により人類が進歩してきたことを主張している。寿命の伸び、健康の改善、食糧事情の改善、富の増大と貧困の減少、平和と安全の増進、民主化の進歩、偏見・差別の減少、知識の増加、生活の質の向上と自由等について、多様なデータを用いて状況が進歩し続けていることを説明している。

教育により人類は賢くなっており、国連開発計画の「人間開発指数」から「世界はまだずいぶんと不平等だが、それでも全ての地域で改善が見られる」と読み取っている。多くのメディアや学者は「改善が見られるものの不平等だ」と批判するのは対照的である。

また、不平等は依然として解決されていないということは認めている反面、不平等は過度に注目され問題視されていると主張している。また、テロリズムの危険も過大評価されていると主張している。幸福に関しては幸福感と豊かさが比例しない理由を、客観的幸福と主観的幸福との違い、自殺率と不幸度の関係、うつ病増加の原因等で説明しており、自由の獲得や、神や権威から離れ自らの責任で生きる不安も幸福感を阻む要因になっていると説明している。私はこの部分には疑問を感じる。全体として進歩したということを行うために、進歩していない部分を過小評価しようとしている様に思えるからである。啓蒙主義に基づくのであれば、データが進歩を示さないのならそれを素直に認めて、その原因を探り、対策を論ずるべきではないか。

最後に、著者はヒューマニズムと対照をなすものに、超自然の力による法の執行を前提とする有神論的道德と、善悪を超越し英雄的栄光を肯定するロマン主義的ヒロイズムがあると述べている。有神論的道德とはイスラム教をはじめとした宗教の反ヒューマニズム的側面のことであり、ロマン主義的ヒロイズムの系譜はニーチェからナチズムを通じて米国大統領のトランプに至る系譜であると述べている。

世界の状況は改善と進歩を示しており、否定的な見解に惑わされず、それを正しく認識するためにはいつでも啓蒙主義を保持することが必要であると結論付けている。

二冊目②の著者の執筆の動機は、歴史的観点から 19 世紀半ばまで中国、インド、日本の経済力は欧米の経済力よりも大きく、産業革命とともに経済を近代化した欧米がアジアの大部分を支配下に置いたが、近年のアジア諸国の台頭により、今後はアジア主導の世界が出現することを主張することである。アジアの経済、貿易、投資、インフラ、国際関係に関するデータや情報に基づき、近年のアジア諸国の目覚ましい興隆と世界への影響力の増大を説明している。分析の視点は歴史学、経済学、経営学、国際関係学等である。対象となっている地域は広義のアジアであり、アジアとの関係で欧米にも言及しているほか、近年のアフリカやラテンアメリカとアジアの深まる経済、政治関係にも多くの具体例を挙げている。

著者は「歴史は終わったのではなく元の状態」に戻り「多様で多文明を経験しつつあり」、欧米との対比において、アジアの人々は「前向き」、「外向き志向」、「楽観的」であるとしている。議論はアジアの古代から近代までの歴史を振り返ることから始めている。メソポタミア、小アジアから始まり、中国、インド、日本、中央アジア、エジプト、ペルシャ、モンゴル、欧州との交流、2 回の世界大戦までの二千年以上を振り返っている。アジアの多様な文明の素晴らしさ、シルクロードを通じた活発な交流、個々の国の資源と発展や、新興企業の状況についても解説している。著者によれば日本と韓国による第 1 の波、中華圏（台湾、香港、中国本土）による第 2 の波に続いて、現在起こりつつある第 3 の波は南アジアと東南アジアが推進力になっていると分析する。勿論、中国と「一帯一路」政策について欧州との関係において言及しているものの、中国の行動のみに着目するのではなく、中国の後から出てくるアジア諸国の活発な経済活動やダイナミズムに着目している。アジア全体が世界を動かし始めていると主張している。現在のアジアのシステムはジグソーパズルのように各経済が補完をし合い、急成長している都市は「接続性」の原動力となっている。輸出を中心とした国家主導型資本主義により目覚ましい経済発展を見せている。

米国と欧州とアジアの関係においては、米国や欧州へのアジアからの移民の状況を民族ごとに述べている。アジア的価値観を背景に、哲学、科学、文化、芸術、スポーツ、建築、食文化、ファッション、映画等に関して、活躍している人々を挙げて、多様な分野でアジアの経済的社会的影響力が急拡大していることを具体的に論じている。欧州においては中国が各国のニーズに合致した個別の対応を見せている。

結論としては、国際法や科学倫理などの世界秩序は欧米によって形成されてきた。しか

し、産業革命の影響が非常に大きく、数百年の遅れをとったアジアが 21 世紀に入って、急速に後れを取り戻している。欧米はアジアの影響力を考慮しなければならないであろう。欧米人の好む「世界のルールに基づく秩序」とアジア人の好む「同じ目標を持つ者たちの社会」が一つに統合されることを希望している。

両方を読み比べると、①は米国を中心に欧米の既存のパワーの正当性を信じて、世界の改善と進歩を主張している。それに対して、②はアジア諸国のパワーの再興を主張している。欧州とアジアには哲学、思考回路、科学、技術、システムに大きな相違があるように思う。アジアの行き詰まりを欧米の科学、技術が解決してきたように、欧米の行き詰まりをアジアの哲学や思考回路が解決する可能性は大きい。

この書評を書いている時点では、コロナ感染症の経済社会的な影響は日々変化しており、まだ何らかの結論を出すことはできない。そして、両方の書籍はコロナ感染症が発生する以前に書かれたものである。コロナ感染症の拡大はこの 2 つの書籍の内容にどのような影響を与えるのだろうか？ 一冊目の①において主張している啓蒙主義は米国の感染者が 300 万人（現時点で）を超す状況をどの様に説明するのだろうか？ 今まで欧米が築き上げてきた社会と制度に何らかの弱点があることを示していると思われる。二冊目の②に関しては、コロナ感染症の拡大により世界の多くの地域で人々の移動は大幅な制限を受けている現状では、アジアからの接続性の強化は、大幅な制約を受けると思われる。アジア発のグローバル化の加速には急ブレーキがかけられたと言える。このような、欧米の文明とアジアの文明の主張のぶつかり合いと戸惑いの中から、将来の新たな文明が創造されるかも知れない。